

令和六年二月

大学院文学研究科

鈴木 健多郎 提出 学位申請論文

『近世遠江における国学の展開―内山真龍とその
門人を中心に』審査報告書

國學院大學

鈴木 健多郎 提出 学位申請論文（課程博士）

『近世遠江における国学の展開―内山真龍とその門人を中心に』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、国学という学問が近世社会でどのように発展をとげたのか、国学者たちがなぜこの学問を究めようとしたのかという問いについて、遠江地域の国学に焦点を定め、代表的な学者のひとりである内山真龍とその門人たちの思想や活動を分析することで、答えようとするものである。

遠江という地域は、荷田春満によって国学がもたらされて以来幕末に至るまで、国学の展開において重要な役割を果たしてきた。なかでもこの地の国学者である内山真龍と栗田土満が本居宣長と学問的交流を持つようになってから遠江の国学は一層の発展を遂げた。本論文は、その中心人物である真龍とその門人たちに焦点を当てて考察を進める。すなわち、遠江の国学者の思想と行動の

具体相を検討することによって、遠江国学の発展過程およびこの地で国学が大勢力となりえた背景について明らかにしようとするものである。

本論文は、序章と七つの章、そして終章からなる。

「序章 本論文の目的」では、近世の遠江における国学の歴史を概観し、遠江に国学に関する先行研究を整理した上で、本論文が遠江を対象地域に設定する理由、遠江の国学の展開過程を分析することの意義、これらの問題を明らかにするために取り組むべき課題について説明した。

「第一章 内山真龍と本居宣長の交流―真龍の学問形成過程解明のために」では、内山真龍の学問形成に大きな影響を与え、遠江の国学が一層発展する重要なきっかけとなった、真龍と宣長の学問的交流について、先行研究をふまえて、これまで先行研究が扱ってこなかった一次史料の分析によって、真龍と宣長の交流と意義について考察した。その結果、両者間における双方向的な学問交流を明らかにした。

「第二章 内山真龍の歌謡注釈―『古事記謡歌註』を対象として」では、真

龍の学問に対する宣長の寄与の実態について検討するために、真龍による古事記歌謡の注釈書『古事記謡歌註』を分析対象とした。『古事記謡歌註』において真龍は宣長の注釈を踏襲することが多く、それは『古事記伝』以外の宣長の著作をも参照するものだった。真龍は、契沖や賀茂真淵による注釈を採用することもあり、さらに真龍独自の解釈を示す場合もある。このような真龍の注釈は、諸説の類聚を作成するという姿勢にもとづくものであった。

「第三章 『仏度伝』」に見る内山真龍の「仏教観」では、著書『仏度伝』を検討し、真龍の仏教観や世界観などを考察した。本書は上代仏教史を史料とともに論じるもので、真龍は本書を教戒の書と位置づけていたと考えられる。真龍は、万物を基礎づけるものとして天地の間に「一柱」があり、これは「心柱」であるという世界観を示し、この「心柱」との関係から戒の重要性を説いた。日本には達磨大師の立てた「心柱」が伝えられたとする一方、本居宣長の神観念に従って、この世の理法は直毘神と禍津日神が司っていると理解した。そして、両者をふまえて直毘神の恩頼や仏の力を享受するためには戒を遵守するこ

とが重要だとした。こうした考えの背景には、真龍の周辺地域で発生した打ちこわしに対する危機意識があったと考えられる。

「第四章 遠江の国学と朝廷の交流―内山真龍による白川家への『神号解』献上を中心に」では、真龍の著書『神号解』が白川家に献上されたことについて、遠江の国学と朝廷・白川家の関係におけるその意味を検討した。本書は『古事記』に登場する神名に注釈を施したもので、宣長の『古事記伝』の説を肯定的に引用する例が多く、地名については真龍自身の説を優先するものの、全体としては宣長説の継承・発展という性格を持つ。献上については、一次資料の分析によって、下賀茂社の泉亭梢永が真龍と白川家を仲介していたことが明らかになった。真龍は同家への入門を懇願してもいたが、それは自邸に造立した真淵の霊社での祭祀執行について公的な許可を得るためと考えられる。他方、真龍と白川家の交流には夏目甕麿の関与も大きかったと思われる。甕麿は国学の発展を目指した出版事業を展開するにあたり、同家との接触に注目していた。また、当時の遠江では吉田家による神職の組織化が進むことに対して同地

の神職にはそれに抗う動きが生じており、このような背景によって甕麿が白川家に入門していたことにも注意すべきである。

「第五章 石塚龍麿の歌論研究と古道論」では、真龍の門人である石塚龍麿の古道論の特徴について、彼の歌論『やま菅』を主対象として論じた。龍麿は同書で『万葉集』所収の歌などに対する漢籍や仏説の影響を指摘しつつ、真淵から宣長へと継承された、古言・古意・古道を順次解明するという姿勢を踏襲し、『万葉集』解釈にあたって古言の理解によって古意を明らかにしようとした。龍麿は宣長と同じく『古事記』における神代を古道の基準とした上で、対象を『万葉集』に定めてその古道のありようを探った。こうした研究姿勢に対して、真龍をはじめ真淵の学問を尊重する門人たちは批判的だったが、龍麿は批判をも辞さない態度で真淵や宣長の説を検討することが彼らの顕彰につながると考えていた。

「第六章 夏目甕麿の国体論——『古野の若菜』を中心に」では、真龍の門人である夏目甕麿の国体論について、著書『古野の若菜』を対象として論じた。

甕磨は同書で、治国の要として君臣の別の厳守と武威による統治をあげる。上巻では、日本の「神代の道」は、仏教・道教の教えと異なり「人の素生」を尊重するもので、君臣の別もこれに根拠をもち、この道が代々伝えられていると説明する。下巻では、文と武の関係性について論じる。為政者の威厳が減じて反逆がおきるのは徳のみで世を治めようとするからであり、治世には武威が重要だと述べ、日本ではそれは神代に淵源する正しい伝統であり、儒仏の排除が必要だとする。このような甕磨の国体論には、産霊神や直毘神・禍津日神を重視する宣長の神觀念や世界觀の影響は見られない。こうした武威統治強調の背景には対外危機への意識は見られず、甕磨の地域重視の姿勢からも、主たる問題意識は国内を対象とするものだったと考えられる。

「第七章 近世遠江の国学における古典觀と学統觀の変遷」では、遠江の国学における記紀研究の歴史を通観し、古典觀や学統觀の変遷を考察した。遠江に国学をもたらした荷田春満は、『日本書紀』の神代巻には教えとしての「神祇道德」が伝えられているとする一方で、古義の解明には古語の考究が不可欠

だと考えていた。杉浦国頭をはじめ初期遠江国学を担った春満の門人たちはこの春満の姿勢を忠実に継承した。賀茂真淵は門人たちに『日本書紀』の訓について研究するよう強く指導する一方、「神祇道德」など書紀に対する道徳的解釈は採らず、晩年には書紀の古意を正しく理解するために『古事記』の重要性を主張した。真淵の門人である内山真龍や栗田土満は『日本書紀』研究を継承したが、それは語義注釈を中心とするもので、彼ら以降の遠江の真淵門人たちにおいては、記紀のうち『古事記』を重視する古典観が確定し、幕末に春満を顕彰する動きが高まる中でもそれは変わらなかつた。

終章では各章をまとめた上で論文全体の結論を示す。すなわち、遠江国学の発展には、本居宣長の研究方針や古道論が大きく寄与した一方で、担い手たちには賀茂真淵の学問を継承しているという自負が共有されていた。彼らは師説を顕彰しつつもその批判をいとわず新たな視点や方法で古意の解明に努めており、他方で自らを取り巻く国家や社会の状況と関連づけて学問に取り組んでいた、と結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世社会において国学という学問がどのような発展をとげたのか、また国学者たちの動機は何か、という問いを視野に収めつつ、遠江地域の国学を対象を定め、その重要人物のひとりである内山真龍とその門人たちの思想や活動について、テキストに沿った内容分析とそのテキストの外的条件——すなわち他の諸テキストとの関係や書物としての流通など——の検討をあわせて行うことで総合的に考察し、遠江の国学の展開過程とその学問的特徴を明らかにしようとするものである。

本論文の総体的な特色は、第一に『古事記謡歌註』『仏度伝』『神号解』といった、これまでその全体を検討されることがほとんどなかった内山真龍の重要著作について、本文の精緻な読解にもとづいてそれらの特徴を論じた点にある。序章で明らかにされているように、論者は研究の出発点において、遠江の国学の歴史の概要を把握するとともに、これまでの研究状況を具体的に確認し、研

究が手薄な部分を的確に抉出する。遠江の国学の展開において真龍は鍵となる人物の一人であったにも関わらずテキストの読解が進められてこなかったのであり、論者はこの状況をふまえて真龍の史料を博搜し、主要著作についてテキストを丹念に読んでいく。その成果は第二章から第四章に明らかであり、地道な読解の結果、本論文はこれまで指摘されてこなかった真龍の思想的特徴の解明に成功している。

その特徴を把握するにあたって、遠江の国学やその外側をなす国学一般の動向を押さえている点も、本論文の考察を説得的なものにしている。論者は、遠江の国学を理解するためには、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長による神祇に関わる古典の解釈の方法を把握した上で、特に真淵および宣長の解釈に対して真龍以降の遠江の国学者たちがいかなる評価をしていたかを検討することが重要だと考える。このような視点にもとづき、各章では個々の国学者やその著作が評価されていく。第一章で宣長と真龍の学問的交流を把握し、第二章および第四章で『古事記謡歌註』や『神号解』の具体的な内容を検討する中で、真龍が

基本的には、古道や神祇に関する宣長の理解や『古事記伝』をはじめとする諸業績をふまえて研究を進めていた実態をとらえている。第五章と第六章では真龍の門人の石塚龍麿や夏目甕麿の学問について検討し、その研究方法に宣長の影響が見られると論じる。他方、彼ら遠江の国学の担い手たちが賀茂真淵の学問を継承しているという自負を共有していたことをも指摘しており、単純ではない学問の系譜意識や継承のあり方を具体的に明らかにしている点は評価できる。

こうした流れを巨視的にとらえたときに通底しているのは、神代に関わる古典として何が正しいテキストとして選ばれるのかという問題であり、それは宗教学研究における聖典論に連なるものである。特に、真龍ら遠江の国学者たちにおける『日本書紀』から『古事記』への首座の交替は、本論文が明確に論じたところである。彼らはさらに、古典の解釈に際して、そこに規範性を求める態度を希薄化している。また、第三章で論じているように、真龍は禅の達磨大師の説と本居宣長の神理解の双方を矛盾なく用いて道徳的な語りを構成しており、国学という学問が神祇や神道のみと結びつくものではないことも示され

る。テキスト解釈に関連して、第七章では『日本書紀』を漢文として読むか、傍訓を重視してやまとぶみとして読むかという問題について真淵と真龍のあいだの鋭い葛藤が示される。これは国学の復古意識にも深く関わるものであり、さらにふみこんだ考察が望まれる。

さて、本論文では遠江の国学者たちの著作に関わる社会的文脈についても視線が向けられている。著作に関わってどのような行動が実際に展開されたかということへの注目があり、それを具体的に追うことで、地域社会や国家との関わりにおいて国学という学問が果たした役割を明らかにしようとしている。地域に関して、遠江の国学が地域と深く結びついていたことの包括的言及はこれまでにもあったものの、真龍には自らの地域に関わる学問についての自負や自信があったことや彼の学問的営為の動機に地域社会の秩序についての関心があったことなどを著作の具体的検討を通じて指摘したことは本論文の成果と考えられる。他方、今後、国学という学問の在地性をめぐって、真龍による門弟教育や地域での教化活動についての具体的説明がなされるならば、その論はよ

り充実したものになるだろう。また、国家との関係については、真龍が白川家を通して朝廷へ接近するという動きの実態を史料にもとづき明らかにし、また甕磨の国体論を分析して、家柄の重視から君臣関係を論じるなど、彼の関心が対外関係ではなく国内の統治に向いていたことを論じている。

遠江の国学が持ったこのような二方向の社会性のうち、本論文では特にそれが地域と深く結びついていた点が強調されていると思われる。ただ、遠江の在地の名主層らが国学に向かうという行動には、全国的な学問ネットワークに参加することで即自的な在地性を克服する、あるいは国学という学知が地域から離脱していくという方向性も認められる。本論文の到達点の先にはこのような観点からの研究の展開も期待したい。

以上見てきたように、いくつかの課題はあるものの、本論文が、遠江の国学について、内山真龍とその門人に焦点を絞り、その著述内容を丹念に読解するとともに、著述の社会的位相を検討したことによって、近世の地域社会における古典研究の実態解明とその宗教史的な理解に新しい知見をもたらしたことは

明らかである。よって、本論文の提出者鈴木健多郎は、博士（宗教学）の学位を授与される資格があるものと認める。

令和六年二月十五日

主査 國學院大學教授

遠藤 潤

①

副査 國學院大學教授

松本 久史

①

副査 愛知学院大学客員教授

林 淳

①